

不定名詞主語文の場面描写機能

雷 桂 林

(東京大学非常勤講師)

要旨 本稿では、不定名詞は主語になりにくいにもかかわらず、不定名詞主語文が大量に存在しているという言語事実に対して、構文機能の角度から同構文の成立する条件を探ってみた。不定名詞主語文の主語には一定の描写的要素が含まれる必要がある。それは、不定名詞は描写的要素を伴ってはじめて定名詞に近い情報を持ち、主語の位置に現れる資格をもつようになるためである。また、このような描写された不定名詞は主語になっているものの、定名詞と等価ではないため、更に述語も描写的要素を伴わなければならないという制約を受ける。本稿は、不定名詞主語文がこのように一定以上の具体性を必要とするのは、同構文が場面描写機能を果たさなければならないためだと考える。

キーワード 不定名詞 主語 場面 情報構造 描写

1. はじめに

中国語においては、不定名詞は通常主語の位置に来にくい(Chao (1968: 47))。例えば定名詞“汤姆”(トム)が主語となる(1)と比べると、不定名詞“一个留学生”(一人の留学生)が主語となる(2)のような文は明らかに容認度が低下する。一般的に不定名詞は(3)のように動詞の後ろに置かなければならない。

(1) 昨天汤姆来了。(昨日トムが来た)

(2) ?? 昨天一个留学生来了。(昨日一人の留学生が来た)

(3) 昨天来了一个留学生。(昨日一人の留学生が来た)

しかし、不定名詞は主語にならないとは限らない。次の(4)が示すように、“到(了)我们班”(我々のクラスに)のような補語を付ければ、“一个留学生”(一人の留学生)のような不定名詞も主語の位置に来ることが可能になる。范继淹 1985 は不定名詞主語文が実際に大量に存在していることを報告し、新聞に見受けられる(5)、(6)のような実例を紹介している。

- (4) 昨天一个留学生来到了我们班。(昨日一人の留学生が我々のクラスに来た)
- (5) 一个星期日, 两位外宾来到这家餐厅…… (ある日曜日、二人の外国人のお客さんがこのレストランに来た。范继淹 1985: 324)
- (6) 除夕的前一天晚上, 湘西山区雪雨交加, 一辆吉普车翻到河里。(大晦日の前夜、湖南省の西の地区では雪と雨が激しく降り、一台のジープが川の中に転落した。范继淹 1985: 323)

論文は更に、これらの不定名詞主語文の成立条件として、不定名詞主語文は複雑な述語構造を持たなければならないということを指摘している。しかし、なぜそのような条件が必要なのかという点については分析を行っていない。

唐翠菊 2005: 9-16 は述語の特徴に目を向け、不定名詞主語文は他動性の高い構文であると主張している。しかし、他動性という視点では、(2) が許容されないのにも関わらず、補語の“到我们班”(我々のクラスに)を伴った同じ自動詞の(4)が自然な文になることをうまく説明できない。

黄师哲 2004 は中国語と英語との違いに着目し、中国語は文法的にテンス形式を持たない言語であるため、事態文としての不定名詞主語文の述語は、時間、場所、様態などの連用修飾語による制約を受けなければならないと指摘している。例えば、(7)のような不定名詞主語文は“昨天”(昨日)のような時間詞を伴うことが多く、こうしたケースでは“昨天”は通常省略されないという。张伯江 2007 も、不定名詞主語文は“靠时间关系定位”(時間関係によって位置づけられる)と述べている。

- (7) 昨天一个留学生来到了我们班。(=(4))

不定名詞主語文の成立要因を中国語の無テンス性に求めるという新たな視点は近年注目を集めている(木村 2002: 298-299、井上 2003: 97 など)¹⁾。本稿では、黄論文の分析を紹介し、それに基づいて考察を進め、不定名詞主語文の構文的特徴を明らかにしたうえで、同構文の成立条件を探ってみたい。

2. 中国語の無テンス性と述語の受ける制約

黄师哲 2004: 101 によれば、現実世界の事態(event)を述べる事態文で

は、当該事態に関与する項 (event argument) が現実の時空間内に存在する具体物でなければならず、その反映として、事態に関与するすべての項は言語上何らかのかたちで時空間的な制約を受ける。時空間的な制約を受けない項は純粹概念的なものに過ぎず、現実世界の事実的なことを表すことができない。黄論文は、「述語は「事態項」を導入することができ、例えば、自動詞は主語の位置に現れる項と事態項の二つの項を持ち、他動詞は主語、目的語、事態項の三つの項を持つ。事態項は変項であるため、直接時空間的な制約を受け得る」という Davidson (1966) の捉え方 (黄師哲 2004: 101 の紹介による) に従い、英語はテンス形式によって述語に具体的な時間性 (過去・現在・未来) を付与し、事態項に対して制約的機能を果たしていると見なしている。

(8) She left / is leaving / will leave.

(8) では、‘left’、‘is leaving’、‘will leave’ のテンス形式はそれぞれ事態項に過去、現在、未来という時間性を与え、現実世界の事態と関係付けているが、中国語にはこのような文法形式としてのテンスがないため、事態項を制約する手段として時間、場所、様態などの連用修飾語を用いなければならないという。例えば次の (9) において、“这时” (この時)、“飞快地” (素早く) などの連用修飾語を伴う動詞句はいずれも時空間の中の具体的な事態を表す。

(9) a. 这时, 一只小松鼠蹿了过去。(その時、一匹のリスが跳んで行った)

b. 一只小松鼠飞快地蹿了过去。(一匹のリスがびよんびよんと跳んで行った)

コミュニケーションが具体性を伴う言語行動であることから見れば、中国語の無テンス性に着目している黄論文は、大河内 1967: 104-105 が提唱した「素表現」という観点や Xu (1997) の「文には十分な情報量を持たせなければならない」という観点と合致しており、言語の本質的なところを突いた説得力を持つ見解である。しかし、黄論文は動詞の前におかれる時間、場所、様態表現などの連用修飾語には目を向けているものの、動詞の後ろの補語は視野に入れていない。実際、補語は事態項を制約するのに重要な機能を果たすようである。

(10) 几天前一个老外来到了我们办公室。(先日一人の外人さんが我々の事務室に来た)

(11) “不好。”一个女人影子走过来。(「まずいな」と、一人の女の影がやってきた。王朔《玩的就是心跳》)

上記の(10)、(11)の下線部の補語はいずれも省略できない要素である。そして、次の(12)に示すように、補語は連用修飾語よりも省略しにくいように思われる。時間、様態を表す連用修飾語を伴わない(12a)、(12b)は容認されるに対して、補語を省いた(12c)、(12d)は不自然である²⁾。

(12) a. _____, 一个小孩哇哇哭了起来。(一人の子供がわあわあ泣き出した)

b. 一个小孩 _____ 哭了起来。(一人の子供が泣き出した)

c.? 这时, 一个小孩哇哇哭了 _____。(この時、一人の子供がわあわあ泣いた)

d.? 一个小孩哇哇哭了 _____。(一人の子供がわあわあ泣いた)

また、(13)が“半天”(半日、長い時間)を必要とすることからも分かるように、数量補語も文を成立させるのに重要な役割を果たしている。黄論文は数量補語の機能についても特に触れていない。

(13) a. *在走廊上, 一个女孩笑了。(廊下で、一人の女の子が笑った)

b. 在走廊上, 一个女孩笑了半天。(廊下で、一人の女の子がずっと笑っていた)

このように、不定名詞主語文が複雑な述語構造を持たなければならないことの原因について、黄論文の解釈も不十分であり、新たな議論を加えざるを得ない。本論文は、不定名詞主語文が成立するには、場面内容の描写機能を果たさなければならず、述語構造が複雑になるのは、場面内容の描写を表す要素を伴わなければならないためだと考える。以下、第3章では述語の描写性特徴を示し、第4章では主語も描写性要素を伴うことを述べ、不定名詞主語文が一定以上の具体性を持つことを確認しておく。第5章ではこのような具体性が要求されるのは、同構文が状況描写的な機能を果たすためであると論じる。

3. 述語の描写的性格

本章では不定名詞主語文の述語の特徴について考察する。非事態文においても事態文においても述語は描写性特徴を呈している。以下それぞれについて考察することにする。

3.1. 非事態文の描写的述語

非事態文の述語は状態的な特徴を示している。范继淹 1985: 324 によると、不定名詞主語文の述語はみな動詞であり、形容詞述語文は見当たらないという。確かに、典型的な形容詞述語文の不定名詞主語文は見つからないが、次のような静態的な述語を含む用例は少なからず存在する。

(14) 此后不久我到东单一家工艺品店买镇尺，一位女售货员同样年轻貌美、衣着入时，大概因为顾客不多，她坐在那儿看书。（その後間もなく東単にある工芸品の店へ文鎮を買いに行った。客が少ないからか、一人の（同じく）若くて綺麗でお洒落な女店員が座って本を読んでいた。陈建功《消费六记》）

(15) 一台双开门大冰箱一尘不染，装饰着桃花台布。（左右開きのドアの冷蔵庫が置かれていて、塵一つもなく、桃の花の模様のテーブル・クロスが飾りとしてかけてある。池莉《城市包装》）

(14) の“年轻貌美、衣着入时”（若くて綺麗でお洒落）は店員に対する静態的な描写である。(15) の“一尘不染，装饰着桃花台布”（塵一つもなく、桃の花の模様のテーブル・クロスが飾りとしてかけてある）も形容詞的な機能を果たし、冷蔵庫の清潔さを描いている。また、次の(16)、(17)における“挂着”（掛けてある），“垂着”（ぶら下がっている）は動作・変化のもたらず結果が持続した状態にあることを表し、描写性のある述語構造を形成している。

(16) 阴森森的古柏中飘游着紫蒙蒙的雾气，一株古柏的树干赫然挂着一面暗红色的锦旗。（薄暗い古いコノテガシワの中を紫がかかった霧が漂っている。一本の古いコノテガシワの木の幹にくすんだ赤の錦の旗が掛かっているのにはっと気づいた。陈建功《放生》）

(17) 一串红灯笼在暮色里垂着。（ひとつながりの赤いちょうちんが暮色の中でぶら下がっている。陈建功《“天桥乐”的红灯笼》）

次の(18)、(19)の“在嚎”（鳴っている），“卸着”（おろしている），“正

在前面的马路中央“跳房子”（門前の道の真ん中で石蹴り遊びしている）などの述語構造は、状態・動作が持続したままの状態にあることを表すため、同じく一種の描写性を伴う叙述である。

- (18) “轰隆隆”、“轰隆隆”，脚手架边儿上，一台搅拌机在嚎。（足場の傍にある攪拌機がどんとどんと鳴っている。陈建功《放生》）
- (19) 一个女人，在院门口卸着自行车后架上的菠菜。几个孩子正在前面的马路中央“跳房子”……（一人の女が庭の門前で自転車の後ろの棚に積んだほうれん草をおろしている。数人の子供が門前の道の真ん中で石蹴り遊びしている。陈建功《前科》）

このように状態的な述語が用いられることから、不定名詞主語文は描写的性格のある構文であることが伺える。また、上記の(14)から(19)の実例が示すように、不定名詞主語文の述語構造はしばしば描写性要素を伴う。このような描写性要素は通常必要不可欠である。例えば、

- (20) a. ?? 窗外，一个女人笑了。（窓の外、一人の女が笑った）
 b. 窗外，一个女人笑弯了腰。（窓の外、一人の女が腹の皮を振って笑っている）
 c. 窗外，一个女人笑得直不起腰来。（窓の外、一人の女が腰が立たなくなるほど笑っている）

状態の描写がない(20a)は明らかに不自然である。具体的な様態を表す“弯腰”（腰を曲げて）を加えた(20b)や“直不起腰来”（腰がまっすぐにならない）のような描写性要素を付加した(20c)は許容度が高まる。

3.2. 事態文に見られる明確な限界点

本節では議論の中心となる事態文に戻り、改めて事態文の複雑な述語構造を描写性機能の面から検討する。3.1で考察した形容詞的な述語構造を持つ非事態文と同様、事態文にも描写的要素が用いられている。

- (21) a. 多年前，一个循规蹈矩的中学历史教师突然失踪。（数年前、あるまじめな中学の歴史の教師が突然行方不明になった。余华《一九八六年》）
 b. ?? 多年前，一个循规蹈矩的中学历史教师失踪。
- (22) a. 我又连踹几踹，一个物体轰然倒下发出巨大的声响，门大开了。（私はまた何回か蹴ったら、ひとつの物体がどかんと倒れ、ド

アが開いた。王朔《玩的就是心跳》

b. ? 我又连踹几踹，一个物体倒下发出巨大的声响，门大开了。

(21)、(22)の述語はそれぞれ“突然”(突然)、“轰然”(どかんと)のような連用修飾語を伴っており、これらの描写性要素は省略しにくい。

事態とは現実世界における特定の時空間内に起きる境界線のある事象のことを指す(沈家煊 1995: 372)。動詞は文のさまざまな成分の中で最も中核的な部分であるため、事態文がもつ描写の特徴は、動詞句が高い限界性を持つことにも反映されなければならない。実際、不定名詞主語文の述語はしばしば限界性の高い補語を伴う。例えば、

(23) 一个坐着的中年妇女看了丁丁一眼，往旁边挤了挤，让他们坐下了。

(座っている中年の女性が丁丁を一目見て、隣に詰めて彼らを座らせてあげた。王海鸽《牵手》)

(24) 当施亚男从美术馆里的一幅画前走开，准备从远处欣赏一下整幅画面的情调时，一个姑娘挡住了他的视线。(施亚男は美術館の中のある絵の前から離れ、少し遠くからその絵の全体のムードを楽しんでみようと思った時、一人の女性に視線を遮られた。张杰《谁生活得更美好》)

(25) 三轮车在区委会门口停住，一个年轻人跳下来。(三輪車は区の自治委員会の入口で止まった。一人の若い男性が飛び降りた。王蒙《组织部来了个年轻人》)

(23)の“一眼”(一目)の付加は限界性をもたらし、開いた事象を閉じた事象に変える機能を果たしている。(24)では動詞に結果補語がついたいわゆる“动结式”が用いられ、また(25)では“跳下来”(飛び降りてくる)のような“动趋式”(動詞+方向補語)といわれるタイプの述語が使用されている。“动趋式”は“动结式”と同様、限界性のある事象を表している(沈家煊 1995: 372、柯理思 2005: 94-95)。

なお、不定名詞主語文は、次の(26)のように述語が“已经”(既に)のような限界性を含意する副詞と共起したり、把構文(27)や受身文(28)のような有界構文に用いられたりすることもある。

(26) 婚礼的行走经过了那破旧的城墙门洞以后，来到了城西坟场上。一个新坟已经掘好。(婚礼の行列がぼろぼろの城壁の表門を通して城の

西郊外の墓地に来た。一つの新しいお墓が既に掘ってあった。余华《世事如烟》

(27) 一阵扑鼻的饭菜香味把我从熟睡中引诱出来。我睁开眼睛，定了定神才发现我睡在大办公室的小套间。(私は熟睡からぷんぷん鼻を突く料理の香りで目が覚めた。注意してみると自分が広いオフィスの中の部屋で寝ていた。池莉《霍乱之乱》)

(28) 一个女生的鞋被踩掉了，一溜一溜孩子挤成手风琴，发出一连串不谐之音。(一人の女の子が踏まれて靴を落とした。子供たちの列が崩れてアコーデオンのように乱れた音がした。王朔《看上去很美》)

これらの述語構造の特徴は、不定名詞主語文の事態文が限界性の高い構文であることを示している。したがって、限界性の高い述語ほど、同構文に用いられやすいと予測できる。例えば、到達 (achievement) を表す動詞は (29)、(30) のように述部に入る。

(29) “啪”的一声，一个大气球破了。(ぱんと、一つの大きな風船が破れた。)

(30) 在此前一小时，一个十一岁的女孩刚刚离去。(今から一時間前、ある11歳の女の子がいなくなった。余华《世事如烟》)

これに対して、限界性の弱い述語構造は当該構文には用いられにくい。

(31) ?? 昨天一个留学生来了。(= (2))

“来了”(来た)の限界性が弱いことは次のように解釈できる。意味的に言えば、“来”(来る)と“去”(行く)は直示方向動詞であり主として話し手の主観的方向を表す。柯理思 2004 は“V去”と“V走”の違いについて、“V去”より“V走”のほうがより限界性のある移動イベントを表すことを論じ、“去”が動作者の主観的方向を表し、限界性が弱いのに対して、“走”は位置変化つまり状態変化を表すため、限界性を付与する機能が強いと説明を加えている。次の“走”を用いた(31')は明らかに“来”を用いた(31)より言いやすくなる。

(31') 昨天一个留学生走了。(昨日一人の留学生がいなくなった)

“来”(来る)、“去”(行く)は瞬間性 (punctuality) の特徴が弱く、限界点のはっきりしない。次の(32)、(33)で示すように進行中を表す“正”、“在”と共起できる。

本節では非事態文、事態文の述語の特徴について考察してきた。いずれの場合においても、不定名詞主語文の述語は描写的性格を帯びている。その描写性の現れとして、黄师哲 2004 が提唱した動詞の前の時間、場所、様態などを表す要素のほかに、動詞の後の補語なども重要な役割を果たしているということが指摘できる。これらの描写性要素の付加によって、文の中核である動詞の表す動きの局面が細かく描かれ、始まり、終わり、全過程などの相が明確になってくる。その結果、非事態文においては様態がはっきり示され（例えば (38)）、事態文の場合は、(39)、(40) のように動詞句が明確な限界点を持つ限界性の強い構造を成している³⁾。

(38) 在走廊上，一个年轻人在傻笑。(廊下で、一人の若者がへらへら笑っている)

(39) 这时，一个年轻人笑了起来。(この時、一人の若者が笑い出した)

(40) 在走廊上，一个年轻人笑了半天。(廊下で、一人の若者がずっと笑っていた)

4. 不定名詞である主語にも必要とされる描写性

前章では不定名詞主語文の述語の描写性特徴を確認した。本章では不定名詞である主語にも描写性要素が用いられることを示す。

一般的には、動詞の前にある主語の位置は定の位置であり、動詞の後ろにある目的語の位置は不定の位置である。例えば定名詞“那本书”(その本)は(41a)のように目的語の位置には置かれにくく、通常(41b)のように主語の位置に置かれる。また、“一本算卦的书”(一冊の占いの本)のような不定名詞が目的語となった(42a)は自然であるのに対して、主語となった(42b)は容認度が低下する。

(41) a. ? 我看了那本书。(私はその本を読んだ)

b. 那本书我看了。(その本は、私は読んだ)

(42) a. 我看了一本算卦的书。(私は一冊の占いの本を読んだ)

b. ? 一本算卦的书我看了。(? 一冊の占いの本は、私は読んだ)

定名詞、不定名詞の典型的な文中の位置は、(43) のように示すことができる。

(43) 主語	述語
topic	comment
[定]	V [不定]

不定名詞が主語の位置に現れるためには、なんらかの描写性要素を伴わなければならない。例えば(44)のような“大鼻子”（大きな鼻）という修飾語を伴っている不定名詞は主語として機能しているのに対し、(45)のような描写性に乏しい純粹な不定名詞は主語にはならない。

(44) 昨天一个大鼻子老外来到了我们班。(昨日一人の大きな鼻の外人さんが我々のクラスに来た)

(45)?? 昨天一个人来到了我们班。(昨日ある人が我々のクラスに来た)

次の(46)、(47)で示すように、不定名詞フレーズ内の描写が少ないほど不自然になる。

(46) a. 一个时髦女郎怔了一下，茫然离去。(一人のお洒落な女性が呆然とし、あっけにとられたような顔で去った。王朔《一点正经没有》)

b. ? 一个女郎怔了一下，茫然离去。(一人の女性が呆然とし、あっけにとられたような顔で去った)

c. ?? 一个人怔了一下，茫然离去。(ある人が呆然とし、あっけにとられたような顔で去った)

(47) a. 一个身穿灯芯绒茄克的男子坐在斜对面。(一人のコーデュロイのジャケットを着た男性が斜め向かいに座っている。余华《偶然事件》)

b. ? 一个男子坐在斜对面。(一人の男性が斜め向かいに座っている)

c. ?? 一个人坐在斜对面。(ある人が斜め向かいに座っている)

朱德熙 1956: 8 が指摘しているように、「描写された事物はもう普遍的な概念ではなく、むしろ特殊な概念となる。よって、描写的連体修飾語は潜在的に指示機能を持つ。そのことは限定的連体修飾語と比べれば明らかである。例えば“白紙”（白い紙）というときはすべての白い紙を指す。“挺白的紙”（とても白い紙）、“雪白的紙”（雪のように白い紙）というときは、通常ある特定の一枚か、ある特定の複数の白い紙を指す」。さまざまな修飾成分を併せ持っている不定名詞は意味的に内包が増え外延が縮ま

り、定名詞に近い存在として認識される。次の(48)の“一个人”(一人の人)は、修飾要素が増えるにつれ、より定的な色彩を帯びるようになり、定名詞に近い存在として(49)で示されるように主語の位置に現れる。

(48) 一个人 → 一个女人 → 一个外国女人 → 一个不穿衣裳的外国女人
(一人の人 → 一人の女 → 一人の外国の女 → 一人の裸の外国の女)

(49) 其实只是一页画片，好像是从哪本画册上撕下来的，一个不穿衣裳的外国女人斜卧在草地上，她的每一寸肌肤都反射出粉红色的光亮，让民丰里的两个男孩触目惊心。(一人の裸の外国の女が芝生に斜めに横になっている。苏童《民丰里》)

しかしながら、このような定名詞に近い情報を担った不定名詞は、主語の位置に用いられるものの、完全な定名詞にはなり得ず、定名詞と等価ではない。結局用法としては非典型的であるため、更に述語も描写性要素を伴わなければならないような制約をうける。そのため、不定名詞主語文の述語は、次の(50b)に示すように、“气势汹汹地”(恐ろしい形相で)という連用修飾語、“走”(歩く)という移動の様態、“过”(通過する)という移動の経路のような、さまざまな具体性を示す成分を併せ持った複雑な構造を成している。

(50) a. ? 一个壮汉来了。(一人の頑丈な男が来た)

b. 一个壮汉气势汹汹地走了过来。(一人の頑丈な男が恐ろしい形相でやってきた)

不定名詞主語文の描写的特徴は存現文と比べるとより明確になる。任鷹 2000: 30 は存現文について次のように述べている。「存現文における動詞は主として具体的な動作を表さず、抽象的な存在・出現・消失の事象を表すため、語彙の意味はある程度抽象化されている。言い換えれば、抽象的な存在・出現・消失という意味は文中において動詞が獲得した意味あるいは実現可能な意味である」。例えば(51)のような存現文において、動詞構造は“走过来”(歩いてやってくる) → “过来”(やってくる) → “来”(来る)のように意味の抽象化が起こりうる。

(51) a. 前面走过来了一个大个子。(前方から一人の背の高い人が歩いてきた)

b. 前面过来了一个大个子。(前方から一人の背の高い人がやってき

た)

c. 前面来了一个大个子。(前方から一人の背の高い人が来た)

存現文は人や事物の存在・出現・消失を表す構文であり、動詞が存在・出現・消失の情報を伝えられれば良く、様態の描写は特に必要としない。(52)のように、生き生きとした様態を描く連用修飾が用いられると、文が成立しにくいことも指摘できる。

(52) ? 磕磕绊绊晃晃悠悠地走过来一个醉汉。(一人の酔っ払いが躓いたりしてふらふらしながら歩いてきた)

これに対して、不定名詞主語文には描写性修飾語が好ましく、しかも(53)で示されるように様態を描く要素が少ないほど成立しにくい傾向がある⁴⁾。

(53) a. 一个醉汉磕磕绊绊晃晃悠悠地走了过来。(一人の酔っ払いが躓いたりしてふらふらしながら歩いてきた)

b. 一个醉汉走了过来。(一人の酔っ払いが歩いてきた)

c. 一个醉汉过来了。(一人の酔っ払いがやってきた)

d. ? 一个醉汉来了。(一人の酔っ払いが来た)

e. ?? 一个人来了。(ある人が来た)

以上の議論から、不定名詞主語文は描写性要素を持つ構文であることが明らかになった。次章ではこのような成分が必要になる理由について構文機能の角度から解釈を加える。

5. 構文の場面描写性機能

不定名詞主語文は場面性の強い構文である。その証拠として、このタイプの文の前にしばしば副詞、擬音語、擬態語、時間詞、場所詞が現われるということが挙げられる。次の(54)の“蓦的”(いきなり)、(55)の“站住”(止まれ)は聞き手の注意を喚起し、聞き手を話し手の設定した場面に引き込み、その場の状況に誘導する効果を持つ。

(54) 蓦的，一个男人哭了起来，那是男人的号啕大哭。(一人の男がいきなり泣き出した。それは男の号泣だ。梁晓声《钳工王》)

(55) “站住”，一个威严的声音喊道。(止まれと、厳しい声をした。范继淹 1985: 323)

時代は大きく遡るが、《水浒传》における不定名詞主語文は、不定名詞の前に“只见”、“见”、“看见”が多く使用されていることが報告されている（张伯江 2007、訳文は駒田信二訳『水浒传』、平凡社、1968: 55 より引用）。

(56) 正想酒哩，只见远远地一个汉子，挑着一付担桶，唱上山来，上面盖着桶盖。（しきりに酒のことを考えていると、ちょうどそのとき、むこうの方から桶をかついだひとりの男が歌をうたいながら山をのぼってきた。桶には蓋がしてある。p.55）

(56) の“只见”は、後ろの不定名詞主語文で語られる主人公の目の前にある状況に読者を誘導し、目に見える状況として描写していくことを示している。現代の中国語においても、次の(57)の“定神看”（注意してみる）、(58)“睁开眼睛”（目を開ける）のように、場面を描写していることを示す表現が多用されている。

(57) 我一鞠躬，地下忽然有人呜呜的哭起来了，定神看时，一个十多岁的孩子伏在草荐上，也是白衣服，头发剪得很光的头上还络这一大绺苕麻丝。（（前略）よく見ると、十歳余りの子どもがひとり、筵の上に身を伏せていた（後略）。『中日対訳コーパス』《彷徨》）

(58) 我赶紧睁开眼睛：一个看上去比较舒服的男子站在我的不远处。（私はぱっと目を開けた。一人の感じの良い男性が私の近くに立っていた。池莉《绿水长流》）

実際、不定名詞主語文の使用環境のみならず、述語にも意味的に場面性が強くなければならないという特徴がある。例えば、

(59) 一个壮汉 *很穷 / *穷巴巴的。(？一人の頑丈な男は貧乏だ)

(60) 一个壮汉 *山东人 / *是山东人。(？一人の頑丈な男は山東の出身だ)

“很穷”（貧乏だ），“穷巴巴的”（貧乏だ）は状態的な述語で描写性を持つものの、場面性が弱いので、(59)のような文は容認できない。名詞述語文と“是”が主語となる文はいずれも属性を表す構文であり、場面を描写するタイプの文ではないため、(60)も容認できない。また 3.1 で挙げた静態的な述語構造を持つ不定名詞主語文において、(61)、(62)に示すように、“衣着入时，大概因为顾客不多，她坐在那儿看书”、“装饰着桃花台布”と

いった、場面性の特徴を有する部分は省略することができない。

(61) a. 一位女售货员同样年轻貌美、衣着入时，大概因为顾客不多，她坐在那儿看书。(=(14))

b. ??一位女售货员同样年轻貌美。

(62) a. 一台双开门大冰箱一尘不染，装饰着桃花台布。(=(15))

b. ??一台双开门大冰箱一尘不染。

したがって、不定名詞主語文の述語は、事物の恒常的な状態を表す個体レベル述語 (individual-level predicate) の類ではなく、むしろ場面レベル述語 (stage-level predicate) の性質を持つと考えられ、一種の眼前性の特徴を持っている。

不定名詞主語文の使用環境や述語の意味の特徴から、同構文が場面内容の描写機能を果たしていることが容易に理解できる。これについては更に情報構造の面から確認することができる。中国語には文末に来る成分が新情報を担う文末フォーカスと、“是”、“连”、音声の強勢などの標識によってマークされる対比フォーカスがある (张伯江・方梅 1996: 73-81)。“是”の挿入可能な位置を考えた場合、(63)を(64)のように三種のフォーカス構造と見なすことができる)。

(63) 武松被捕前杀了三个坏人。(武松は捕まる前に三人の悪人を殺した)

(64) a. 武松被捕前是杀了三个坏人。(=武松是因为杀了三个坏人被捕)
(武松が捕まったのはその前に三人の悪人を殺したからなのだ)

b. 武松是被捕前杀了三个坏人。(=武松杀了三个坏人是在被捕前)
(武松が三人の悪人を殺したのは捕まる前だった)

c. 是武松被捕前杀了三个坏人。(=被捕前杀了三个坏人的是武松)
(捕まる前に三人の悪人を殺したのは武松だ)

(64a)、(64b)、(64c)はそれぞれ“杀了三个坏人”(三人の悪人を殺した)という動目構造、“被捕前”(捕まる前)という時間詞、“武松”(武松)という動作主がフォーカスとなり、最も際立った情報を持っている。これに対して、存現文は次の(65)で示されるように、“是”で文全体を取り立てることができないため、フォーカスがなく、文全体を一つの情報形式と見なすことができる⁵⁾。

(65) ?? 是前面走过来了一个大个子。(前方から一人の背の高い人が歩いてきた)

存現文と同様に、不定名詞主語文にも“是”は挿入しにくい。

(66) a. ?? 一个醉汉磕磕绊绊晃晃悠悠地是走了过来。

b. ?? 一个醉汉是磕磕绊绊晃晃悠悠地走了过来。

c. ?? 是一个醉汉磕磕绊绊晃晃悠悠地走了过来。

(66)の動詞の前、連用修飾語の前、文頭にはいずれも“是”が入らず、これは、不定名詞主語文もフォーカスがなく、構文全体が一つの情報形式を成していることを示している。同構文の主語の指示対象、述語が表わす行為はいずれも描写され、情報の際立ちが均等であり、主語と述語が共同で場面の説明に貢献する。そのため、不定名詞主語文の不定名詞は主題にはならず、主語として機能する。(67)における不定名詞の“一个醉汉”(一人の酔っ払い)は日本語では通常「が」でマークされ、「は」を用いた(68b)は不自然となる。

(67) 一个醉汉磕磕绊绊晃晃悠悠地走了过来。(=(53a))

(68) a. 一人の酔っ払いが躓いたりしてふらふらしながら歩いてきた。

b. ?一人の酔っ払いは躓いたりしてふらふらしながら歩いてきた。

范继淹 1985: 325 によると、第 23 回夏季オリンピックに参加したスポーツ選手が順次帰国する際、子供たちが選手に花束を贈ったことを叙述するのに、新華社の 4 回にわたる通信文はいずれも不定名詞主語文が用いられていたという。次の(69)、(70)はそれぞれ 8 月 7 日、8 月 13 日の通信文である。

(69) 六十名首都少年儿童有节奏地高呼“欢迎，欢迎，热烈欢迎”的口号，并依次将鲜花献给他们。(60 名の首都少年がリズムにのって「歓迎、歓迎、熱烈歓迎」のスローガンを大声で叫び、順次花束を彼らに捧げた)

(70) 二十一名首都少先队员在机场卫星厅向胜利归来的健儿献了鲜花。

(21 名の首都少年先鋒隊員が空港の衛星ホールで凱旋してきた選手に花束を捧げた)

注意すべき点は、(69)、(70)のような文は描写の重点を子供たちに置いているわけではなく、また選手たちに置いているわけでもなく、歓迎の場

面そのものにあるという点である。当該の場面を描く日本語の文は同じく動作主が「が」でマークされ、主題を表す「は」には置き換えられない。

(71) a. 在走廊上，一个女孩咯咯咯笑了半天。(廊下では、一人の女の子がけらけらと笑った)

b. ?在走廊上，那个女孩咯咯咯笑了半天。(廊下では、あの女の子がけらけらと笑った)

(71) は、日本語の訳文からも裏付けられるように、文頭にある“在走廊上”（廊下では）が主題となり、後続する文に対して廊下という場に対する叙述描写を求める。(71a) では、不定名詞主語文の描写機能がうまく働き、自然な文になる。これに対して、(71b) では、定名詞“那个女孩”（あの女の子）も叙述描写の対象になりやすいため、この定名詞を含む主語文が、先行する主題である“在走廊上”（廊下では）が求めている場面内容への叙述描写を果たせず、容認度が落ちるのだと考えられる。

(72) a. ?? 蓝蓝的天上，那只苍鹰在自由飞翔。(青空では、あのオオタカが自由自在に飛んでいる)

b. 蓝蓝的天上，一只苍鹰在自由飞翔。(青空では、一羽のオオタカが自由自在に飛んでいる)

(72) は描写の色彩が濃くなる。定名詞“那只苍鹰”（あのオオタカ）を含む主語文が青空の描写にそぐわないのに対し、不定名詞“一只苍鹰”（一羽のオオタカ）を含む不定名詞主語文は自然に用いられる。(72a)、(72b) の自然度の差は不定名詞主語文の場面描写機能を明確に示している。

〈注〉

- 1) 不定名詞主語文の成立要因をめぐって、さまざまな研究がなされている（詳細は邓思颖 2003、魏红・储泽祥 2007 参照）が、比較的影響の大きいものは、この他に Xu (1997) を挙げることができる。Xu (1997) は、Grice (1975) の協調の原理の一つである「量の公理」を用い、“?? 一个人来了。”（一人が来た）のような文が言えないのは伝達する情報の量が少なすぎるからだとして述べている。しかし、主語の“一个人”（一人）を“一个留学生”（一人の留学生）、“一个大鼻子留学生”（一人の大きな鼻の留学生）のように変え、情報を増やした形にしても、述語が変わらない限り成立しにくく、また、実際のデータからもそのような実例は見当たらない。

?? 一个留学生来了。(一人の留学生が来た)

? 一个大鼻子留学生来了。(一人の大きな鼻の留学生が来た)

- 2) 次の例で分かるように、補語を伴わない“? 两个留学生来了”(二人の留学生が来た)のような不定名詞主語文は時間、場所、様態表現などの連用修飾語をつけても不自然である。

?? 昨天下午, 两个留学生来了。(昨日の午後、二人の留学生が来た)

?? 广场上, 两个留学生来了。(広場には、二人の留学生が来た)

?? 两个留学生急匆匆地来了。(二人の留学生が急いで来た)

なお、本稿では、補語のような動詞の後の成分が動詞の前の成分より省略しにくい事実は指摘しているものの、二者の具体的な関係などについては、紙幅の関係でこれ以上深入りしない。

- 3) 本稿では、描写という概念を広義にとらえ、具体的事物のありさまのみならず、具体的事態のありさま(始まり、終わり、数量など)も含める。
- 4) (51a)からも分かるように、存現文は場面描写機能を持ちうる。しかし、次の描写性要素を必要とする a と比べれば明らかのように、b のような出現を表す存現文は必ずしも事物の描写を伴わなくても良い。つまり存現文の基本的な機能は必ずしも場面描写とは限らない。存現文と不定名詞主語文の相違について、本稿は必要に応じて取り上げているが、紙幅の関係でこれ以上の分析は別の機会に譲る。

a. ?? 一个人来到门口。(ある人が玄関に来た)

Cf. 一个彪形大汉来到门口。(ある頑丈な男が玄関にやってきた)

b. 门口来了一个人。(玄関には誰かが来ている)

- 5) 文末フォーカスと対比フォーカスの他に、文全体が一つのフォーカスとなる文フォーカス構造(sentence-focus structure)を持つ文があると主張する見方もある(Lambrecht (1994: 223))。しかし、文が一定の情報を持つ形式においてその中で特に際立っている部分がフォーカスとして認識されるため、際立っている部分が存在しない以上フォーカスがあるとは考えられない。物を認識する際も同様である。二つ(あるいは二つ以上)の物が目に入るとき、それぞれ地(ground)と図(figure)が分かれるように認識され、図が地を背景にフォーカスとして浮き上がる。図と地はお互いに依存しあう関係にある。物が一つしかない場合は、背景がない以上、フォーカスは存在しようがない。即ち、文全体が一つの情報を担う場合、フォーカスがあるとは考えにくい。

〈参照文献〉

- 井上優 2003. 「「テンスの有無」と文法現象—日本語と中国語—」, 『時間表現・空間表現の意味の構造化に関する日本語と中国語の対照研究』, 平成 13-14 年度科学研究費補助金(基盤研究 C(2)) 研究成果報告書. 97 頁。
- 木村英樹 2002. 「アメリカにおける中国語文法研究の動向」, 『中国語学』249: 298-299 頁。

- 大河内康憲 1967. 「複句における分句の連接關係」, 『中国語学』 176, 大河内康憲著『中国語の諸相』, 1997 再録: 104-105 頁。白帝社。
- 邓思颖 2003. 「数量词主语的指称和情态」, 《语法研究和探索 12》: 292-296 页。
- 范继淹 1985. 「无定 NP 主语句」, 《中国语文》 5 : 321-328 页。
- 黄师哲 2004. 「无定名词主语同事件论元的关系」, 黄正德主编《中国语言学论丛》第 3 辑: 93-110 页。北京语言大学出版社。
- 柯理思 2004. 「动词后置成分“走”的语法化」, IACL-12 提交论文。
- 柯理思 2005. 「讨论一个非典型的述趋式: “走去”类组合」, 沈家煊·吴福祥·马贝加主编《语法化与语法研究(二)》: 94-95 页。商务印书馆。
- 任 鹰 2000. 《现代汉语非受事宾语句研究》: 30-31 页。社会科学文献出版社。
- 沈家煊 1995. 「有界与无界」, 《中国语文》 5 : 371-372。
- 唐翠菊 2005. 「从及物性角度看汉语无定主语句」, 《语言教学与研究》 3 : 9-16 页。
- 魏红·储泽祥 2007. 「“有定居后”与现实性的无定 NP 主语句」, 《世界汉语教学》 3 : 38-51 页。
- 张伯江 2007. 「“出现句”在近、现代汉语中的语法化」, 第四届汉语语法化问题国际学术讨论会论文。北京语言大学。
- 张伯江·方梅 1996. 《汉语功能语法研究》: 73-81 页。江西教育出版社。
- 朱德熙 1956. 「现代汉语形容词研究」, 《语言研究》 1。收于朱德熙著《现代汉语语法研究》, 1980 : 8 页。商务印书馆。
- Chao, Yuenren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*, University of California Press. 吕叔湘译《汉语口语语法》 2001 : 47 页。商务印书馆。
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Reference*. Cambridge University Press. 206-333.
- Xu, Liejiong. 1997. Limitations on subjecthood of numerically quantified noun phrases: a pragmatic approach, In Xu Liejiong (ed) *The Referential Properties of Chinese Noun Phrase*. Collections des Cahiers de Linguistique Asie Orientale 2. Centre de Recherches linguistiques sur l'Asie Orientale. 25-44.

无定名词主语句的场景描写功能

雷 桂 林

(东京大学非常勤讲师)

提要 汉语中主语通常为有定形式,但实际语料中却也存在大量的无定名词主语句。本文从句式功能的角度出发,尝试对无定名词主语句的成立条件进行新的探索。诸多语言事实表明,无定名词词组中多含有描写修饰成分,以一种近似于有定名词的形式出现在主语位置上,但这种非典型用法导致该句式功能受限,同时在谓语中也带要上描写成分,以保证语言表达时所需的具体性。也就是说,在无定名词主语句中,无论主语还是谓语都带有描写色彩。此外,信息结构的视角也进一步表明,该句式整体是一新信息的载体,因而无定名词主语句真正描写的对象并不是位于动词前的主语,而是主语所指事物所在的场景。基于上述分析,本文认为,无定名词主语句的基本功能是用于对某一场景进行描写。

关键词 无定名词 主语 场景 信息结构 描写